

# 語用論の最近の動向

——関連性理論を中心に——

井谷 玲子

プラグマティックスと呼ばれる言語学の一分野は日本語では語用論と訳され、あるコンテキスト内でいかに語（又発話）を用いるかを決定する理論と考えられることもある。例えば Leech (1983) は丁寧さの原則を唱え社会言語的制約を挙げている。しかしながら、Austin (1962), Searle (1969) は真理条件に基づく意味論の限界を指摘しスピーチアクト理論を唱え、言語使用上の制約というより、発話行為の意味解釈の説明を試みた。さらに Grice (1975) は協調の原則と質、量、関連、マナーという4つの公理を唱え、発話解釈の際の聴者の推論のよりどころになるとした。Griceは、推論によって導かれた意味を implicature (含意) とし、文の表わす命題の真理条件では扱えない意味としている。例えば次の Peter の応答は一見 Mary の質問に答えていないようだが、聴者が関連の公理に基づいて推論をするとつじつまのあう含意が導かれる。

(Early in the morning)

(1) Mary: What time is it now?

(2) Peter: The milkman has just come.

(3) Implicature: It's around 6:30 a. m.

(4) Context: If the milkman's come, it's around 6:30 a. m.

Mary と Peter は上記のコンテキストを共有し、それに基づいて上記の含意、つまり Mary の質問に関連する答えが導かれる。Grice はこの含意の recovery process を「推論」としているが、その推論過程を明示していない (Sperber & Wilson 1986)。

これに対して、Sperber & Wilson は、関連性理論の枠組を使い(3)を導く推論過程を明確化している。関連性理論においては、Implicated Premise (含意された前提) と Implicated Conclusion (含意された結論) が区別され、それぞれに上記の(4)と(3)が該当する。ここで使われる推論ルールは、 $P, P \rightarrow Q \vdash Q$ : Modus Ponendo Ponens と呼ばれる

もので(2)が  $P$  に当たり、 $P \rightarrow Q$  (If  $P$  then  $Q$ ) にあたるのが(4)である。

If  $P$  then  $Q$  (i. e. (4)) というコンテキストを背景に Peter の発話(2)が与えられ (i. e. given  $p$ )、そして Modus Ponendo Ponens により  $Q$  (i. e. (3)) が導かれるのである。

以上推論過程を明確化してきたが、Grice が明確にしていないもう一つの問題、即ちコンテキストの選択の問題について述べよう。Grice 理論では、何故、聴者が次の(5)のコンテキストを選ばず(4)を選ぶかが明らかにされていない。

(5) Context: If milkman's come, a bottle of milk is at the door.

(5)は Peter の発話(2)からアクセスできるコンテキストに異いはない。Grice は、関連の公理を我々の直観的判断に訴え、'Be relevant' と言う以外何も述べていない。確かに(4)から導かれる implicated conclusion (i.e., It's around 6:30 a. m.) が(5)のものより (i.e., A bottle of milk is at the door) Mary の発話(1)と関連性があるのだが、それを説明する理論が必要なのである。

関連性理論は、'Be relevant' を次のように定義している。(i)ある発話とコンテキスト情報両方を使い (i. e. (2)と、(4)又は(5)) 含意を出す。(ii)ある発話がコンテキストにある情報と矛盾し、発話がその既存情報と置きわる。(iii)ある発話がコンテキストにある情報の確信度を強める。

尚、(4)か(5)のいずれかという決定要素であるがそれは 'optimal relevance' という概念である。これは最小限のコストで最大限の効果をあげようとするものである。Mary が時間を聞いたからには、その時間から follow するものがあるからである。例えば6時半ならすぐ出かけなければならない、そうならば、急いで仕度をしなければならないといった類である。それに引き換え、(5)の結論部分である 'A bottle of milk is at the door' は、ミルク

を家に入れなければならないという含意を導くかもしれないが、もしそれがMaryにとって 'optimally relevant' なものであれば、Maryは時間を(1)で聞くのではなく、'Has the milkman come?' と始めから聞いたであろう。

上に考察したように、関連性理論はより説明力のある理論であり今後の発展が期待される。

#### 参考文献

Austin (1962). How to do things with words :

Clarendon

Lemmon (1965). Beginning Logic : Van Nostrand Reinhold

Leech (1983). Principles of Pragmatics : Longmann

Searle (1969). Speech Act : Cambridge

Sperber & Wilson (1986). Relevance : Communication and cognition : Blackwell